

# 古王国第5王朝最後の王、ウニスの時代

吹田 浩\*

Hiroshi SUITA\*

## 1 はじめに

関西大学では2003年から古王国時代第5王朝の王、ウニスの時代の文化財の修復プロジェクトを始めている。2011年1月に勃発した革命以降は、活動に様々な制約を受けているとはいえ、紀元前2360年ごろにさかのぼる古代エジプト時代の文化財の修復プロジェクトは進んでいる。このプロジェクトは、正確には、第5王朝最後の王、ウニスの娘とされているイドゥートという王女の墓がもつ地下埋葬室の壁画の保全、保存、修復を中心としており、現地で調査を開始してすでに10年以上の時が経っている。

古王国という時代を考えると、第4王朝のクフ王、カフラー王、メンカウラー王などを思い浮かべることが多い。彼らはギザの3大ピラミッドの建設者たちであり、古王国の絶頂期を表しており、一般にはこの時期の話がカルチャーセンターなどでは期待されている。ピラミッドはどのようにして作られたとか、その隠されて秘密は何かなどである。近年、新たな発見を含めて研究が進んでいるが、まだまだ謎が多いのも現実である。古代史はいずれの国であっても謎が多いものであるが、このことは古代エジプト史の研究にもやはりあてはまる。

このセミナーでは、関西大学のサッカラで調査してきた経緯から、第4王朝ではなく、むしろ一般にはあまり注目されていない第5王朝を扱うことにする。クフ王やカフラー王のピラミッドがまさしく古王国時代の絶頂を表している一方、すでにメンカウラーのピラミッドは急速に小さくなっており、早くも成長の限界を表している。

古王国は、第4王朝のクフのときに中央集権体制が完成し、そのあと徐々に崩壊してゆき、第6王朝の終わりには地方の支配者が独立していき、王国としての統一を失い、第一中間期へと移ると考えられている。では、第5王朝のウニスの時代はどのような雰囲気の時であったのだろうか。

---

\* 関西大学文学部 (Faculty of Letters, Kansai University, Japan)

そもそも古王国時代は資料に限られるが、特に今回取り上げるウニスの時代は資料が少ないとされている。ウニスの時代の話に入る前に、このような古代エジプト史の研究の特色、あるいは問題点について述べてみたい。そのあと、ウニスの時代、正確には、少し後の時代の資料を用いて、古王国の第5王朝末期や第6王朝の初頭の雰囲気を考えてみたい。

## 2 古代エジプトにおける歴史

初めに歴史の研究とはどのようなものであろうか。歴史家にとって一番ありがたいのは、研究対象の時代の人たちが歴史書を残してくれている場合であろう。このような当時の歴史書が残されていることは特に不思議なことではなく、日本史、東洋史、西洋史の研究においても、通常、当時の人たちが作成した歴史書をもとに、他の考古資料などを追加して、新たに解釈を加えたりなどして、歴史を再構成している。

古代エジプトの歴史は、日本では伝統的に西洋古代史のなかに含まれるとされてきた。この関連で、ヘロドトスの『歴史』、プルタルコスの『対比列伝』などを読むと、大概の現代の歴史書に述べられていることはそれらの本からの引用で書かれていることに気づくことになる。逆に言えば、今日、古代ギリシア史や古代ローマ史について我々が歴史として知っていることのほとんどがそれほど多くはないいくつかの当時の歴史書からの引用ということになる。もしヘロドトスやプルタルコスなどからの資料を研究から除いてしまうと、今日の古代ギリシア史や古代ローマ史の歴史像は極めて貧困なものになってしまうはずである。

これには、古代ギリシアや古代ローマの歴史家の意識の高さを指摘することができるであろう。少し具体的に彼らがどのようなことを言っているのか見てみたい。ヘロドトスは、その著述である『歴史』の巻2、99で、以下のように述べている。

「これまでは私が自分の眼で見たこと、私の見解および私の調査したところを述べてきたのであるが、これからはエジプト人の話してくれたことを、私の聞いたとおりに記してゆくことにしよう。しかし私の実見したこともいくらかは、それに添えて述べるはずである。」<sup>1</sup>

彼が「歴史の父」と呼ばれていることはよく知られている。紀元前5世紀の人で、本来はペルシア戦争の原因について書き残そうとしたものであるが、あわせて、「ギリシア人や異邦人の果たした偉大な驚嘆すべ事績の数々」(巻1、序)<sup>2</sup>として古代オリエントの歴史、地理、風俗について詳細に書き残しているのである。

彼の記述は、前5世紀のもので、我々が期待しているファラオ時代のエジプト、つまり、紀

---

1 以下の訳を用いた。松平千秋訳、ヘロドトス、『歴史』上、岩波文庫、岩波書店、1971年、219 - 220頁。

2 同書、9頁。

元前3千年以降の古王国、中王国、新王国の時代からは遠く離れ、彼が生きた前5世紀ではエジプト社会そのものが大きく変化してしまっていたはずである。この点がヘロドトスの『歴史』を利用する際に注しなければならず、またこの著述をそのまま使えない残念なところとなっている。

また、アリアノスという人物も紹介してみたい。この人物は、紀元後2世紀のギリシア人であるが、ローマ帝国で高官となった人物である。彼は、『アレクサンドロス大王東征記』を著し、その第1巻序言で以下のように述べている。

「私はアレクサンドロスの事績を記録するにあたってまず、ラゴスの子プトレマイオスとアリストブロスの子アリストブロスが、ともにおなじことを書きのこしているばあいには、それをまったく真実のこととして書きとめることにする。ただし両者の伝えが一致しないばあいには、私としてそのうち比較的信頼がおけて、しかも記述するに足ると思われた方を選ぶことにした。実際アレクサンドロスについては、さまざまな記録者がさまざまなことを書いてきた。これほど多くの記録者に書かれながら、これほどにも彼らの伝えるところが互いにまちまちで一致しない人物もないものだ。しかしその物語るところにおいて、比較的信頼がおけると、この私に思われたのは、先に挙げたプトレマイオスとアリストブロスのふたりなのである。」<sup>3</sup>

このような冷静で客観的ともいえる歴史への態度は、今日の歴史観にも通じるものである。古代ギリシアや古代ローマ、あるいはアレクサンドロス大王について我々が歴史として知っているものは、実は我々と同じ価値観と表現方法をもつ彼ら古代人の記述を通してなのである。

では、古代エジプトの場合はどうであろうか。古代エジプトの歴史を考えるとときには、残念ながらヘロドトスやアリアノスのような歴史家はいない。日本では、「西洋古代史」という言い方をすることがある。その場合、古代エジプト、古代メソポタミア、古代ギリシア、古代ローマの歴史をまとめて、このような言い方をしている。しかし、資料の数と性格という点で、古代オリエントと古代ギリシア・ローマのあいだには大きな隔りがある。とりわけ、資料の性質という点で、古代エジプト史の研究は、古代メソポタミアの研究（アッシリア学）と同じく、古代の歴史家が著した歴史書がないという点で大きなハンディがあるのである。

そもそも日本では常識的に「西洋古代史」という用語が使われているが、この用語も怪しい。通常、ヨーロッパやアメリカでは「オリエント学」「東洋学」(Oriental Studies, Orientalistik) いうものがあり、そこに古代エジプトや古代メソポタミアの研究が含まれる。そして古代ギリシアや古代ローマの研究は、「古典学」(Classical Studies, Klassische Altertumswissenschaft) というものにまとめられている。筆者はヨーロッパやアメリカの制度が無条件で素晴らしいと

---

3 以下を用いた。大牟田章訳、アリアノス、『アレクサンドロス大王東征記』上、岩波文庫、岩波書店、2001年、35頁。

考えているわけではないが、研究の先進国の方法にはそれなりの理由があるものである。

日本でいう「西洋古代史」とは何であろうか。その名前からは、今日の西洋の中心であるイギリス、フランス、ドイツの古代史を意味すると取るべきである。しかし、現実ではそのようにはなっていない。むしろ今日のヨーロッパでは経済的な観点では比較的基盤のぜい弱な国であり、中心的な役割を必ずしも果たしているとは言えない、いわば周辺の国に当たるギリシアとイタリア（ローマ）の古代時代の歴史となっている。今日のヨーロッパで中心となっている国々の古代史は、ケルト人の歴史となるはずである。教科書的に言えば、紀元 800 年になって、フランク王国のカールがローマ皇帝の帝冠を与えられて、古典古代文化、キリスト教的要素、ゲルマン人の要素が融合して、西洋中世世界が成立する。したがって、古代ギリシアや古代ローマは、「西洋文化の源流」という言い方をされることになり、それらの国の歴史も「西洋文化の源流」の歴史という扱いとなっている。地域的な意味での古代地域には、そもそも西洋を構成するはずの 3 つの要素が 1 つもないのである。

そして古代エジプトやメソポタミアの歴史は、このような日本の西洋史学の立場からは、古代ギリシアやローマに関連する範囲でのみ限定的に扱われることが近年明確になってきた。このような意味で、日本で言う「西洋古代史」という区分には無理があり、このような枠組みのなかでは古代エジプト史研究やメソポタミアの研究は自立した研究ができないのが現実である<sup>4</sup>。

残されている資料の性格も、古代エジプトのものは大きく異なる。歴史家のいない当時の資料の解釈ははるかにむづかしい。時間の上でも、古典古代の時代よりもさらに 2 千年以上古くなり、資料の劣化による解読のむづかしさも加わる。資料の解釈以前に読解の段階でさえ、研究者の間で新しい解釈が出されることになる。このような点でも、古代ギリシアや古代ローマの歴史とは、研究の出発点でそのあり方が異なってくる。

歴史の基本になる年代の設定を、例としてあげることができる。古代ギリシアでよく知られている事件は、ほぼ正確に年号が割り当てられている。例えば、ペイストラトスが僭主政を樹立したのは、「前 561/0 年」<sup>5</sup>とされている。たった 1 年の違いしか誤差がないのである。この 1 年の誤差は、古代ギリシアでは 4 年ごとに開催されるオリンピックに合わせたオリンピック暦が使われており、このオリンピックが夏に開催され、ここから新年が始まると計算されていたことから来る誤差なのであろう。

---

4 そもそもエジプト学やアッシリア学という場合、歴史学だけを切り離すことはない総合的な学問となっている。アメリカの大学では、シカゴ大学のように近東言語文明学科 (Department of Near Eastern Languages and Civilization) という言い方がよくされる。言語を始めに学んで、文明の勉強を行うことになる。また、拙稿、「日本・エジプト合同マスタバ・イドゥート調査ミッション第 5 次調査 (2007 年度) の概要」『関西大学文学論集』第 58 巻第 2 号 (2008 年)、44-45 頁、および注 10 も参照にされたい。

5 例えば、『西洋古代史研究入門』、東京大学出版会、1997 年、21 頁。

古代エジプトの誤差は、かなり大きい。本稿で扱う第5王朝はどうであろうか？

前 2500 年－前 2350 年 The Culture of Ancient Egypt (1956)<sup>6</sup>

前 2494 年－前 2345 年 The Cambridge Ancient History (1971)<sup>7</sup>

前 2513 年－前 2374 年 The Oxford Encyclopedia of Ancient Egypt (2001)<sup>8</sup>

では、ヘロドトスのような歴史家のいないエジプトではどんな資料が基本となるのであろうか。

古代エジプトの歴史を著したマネトという神官がいた。彼は、紀元前3世紀にプトレマイオス朝の王のために『エジプト誌』(Αἴγυπτιακά)を書いた人物である。これが、今日のエジプト学研究の一番の基本になっている。むしろ、いくつもの問題がある。オリジナルの記録が残っておらず、引用されたものしかなく、本来の記述を知ることができない。アフリカヌスという人物が残しているものが通常使われている。また、たとえオリジナルのもので残っていたとしても、彼の『エジプト誌』は、紀元前3世紀に書かれたものであり、紀元前3千年ごろから始まる古代エジプトの歴史についてそのまま受け入れることはできない。その記述も、すでに見たヘロドトスやアリアノスのような今日の歴史家もが使うような記述方式を取っていない。

それでも、彼の書は唯一のものであり、今日でもエジプト学の基本となっている。何よりも王に古代の正しい歴史を伝えようとして作成されたこと、またプトレマイオス朝時代では古代エジプト語が使われ、その象形文字の文書の作成が行われ、十分に古代エジプト時代の文書を扱うことから、重要なのである。このマネトの書は、ロエブ古典文庫 (Loeb Classical Library) において、ワデル (W. G. Wadell) が翻訳している<sup>9</sup>。ロエブ古典文庫では、文庫の左のページにギリシア語やラテン語のテキストが載せられ、右のページに翻訳がなされている。古典学を学ぶ者にとっては必須の文庫になっている。

本稿の対象である第5王朝については、ウニスを含めて、以下ように書かれている。マネトの原本は失われているため、ここにあるのはアフリカヌスという人物が引用したものになる。

第5王朝はエレファンティン出身の8人の王からなっていた。

1. ウセルケレース (Usercherès) 28年間
2. セプレース (Sephreès) 13年間
3. ネペルケレース (Nephercherès) 20年間
4. シシレース (Sisirès) 7年間

6 John A. Wilson, *The Culture of Ancient Egypt* (Chicago, 1956), p. 319. 本来は、The Burden of Egypt の名前で、1951年に出版されている。

7 *The Cambridge Ancient History*, Vol. 1 (3rd edition; Cambridge, 1971), p. 995.

8 *The Oxford Encyclopedia of Ancient Egypt* (Oxford, 2001), back cover flyleaf.

9 W. G. Wadell, *Manetho* (Loeb Classical Library; London, 1940).

5. ケレース (Cherēs) 20 年間
  6. ラトゥレース (Rathurēs) 44 年間
  7. メンケレース (Mencherēs) 9 年間
  8. タンケレース (Tancherēs) 44 年間
  9. オンノス (Onnos) 33 年間
- 計、248 年。

前に述べられた最初の 4 王朝の 1046 年に加えて、これで 1294 年となる。

マネトのギリシア語での記述は、以下である。エジプト学を学ぶ者はギリシア語についても、簡単な知識が必要である。以下のギリシア語がわかるなら、十分であろう。

Κατα Αφρικανον.

Πέμπτη δυναστεία βασιλέων η' ἐξ Ἐλεφαντίνης.

α' Οὐσερχέρης, ἦτη κη'.

β' Σεφρής, ἦτη ιγ'.

γ' Νεφερχέρης, ἦτη κ'.

δ' Σισίρης, ἦτη ζ'.

ε' Χέρης, ἦτη κ'.

ς' Ραθούρης, ἦτη μδ'.

ζ' Μενχέρης, ἦτη θ'.

η' Τανχέρης, ἦτη μδ'.

θ' Ὀννος, ἦτη λγ'.

Ὅμοῦ, ἦτη σμη'. γίνονται σὺν τοῖς προτεταγμένοις ,αμς' ἦτεσι τῶν τεσσάρων δυναστειῶν ἦτη ,ασδ'.

ファラオ時代を中心に研究を行う<sup>10</sup>のであれば、ギリシア語はそれほど詳しくなくてもかまわないが、ある程度の知識は必要になる。ちなみに、近代語では、英語に加えて、ドイツ語とフランス語で本や論文が読めないと研究にはならない。もう少し言うと、学部の2回生の段階で英語の文献が読めて、3回生でドイツ語かフランス語のいずれかの文献、4回生で残っているドイツ語かフランス語で文献が読むのが、エジプト学を学ぶ者の通常のコースになる。

これらに合わせて、古代エジプトの言語の基本も知っておいたほうがよいであろうが、これは機会があるかどうかにかかっている。多くの大学には、古代エジプト語の授業はなく、また独学も難しい。可能ならば、学部時代には中期エジプト語 (Middle Egyptian) の基本を知っておき、

---

10 エジプト学の研究案内として、以下がエジプト学を志す者に重要な文献となっている。河合望、「埃及学指南のための覚書」『エジプト学研究』第22号(2016年)、205-227頁。

[http://www.egyptpro.sci.waseda.ac.jp/pdf%20files/JES22/14\\_Kawai.pdf](http://www.egyptpro.sci.waseda.ac.jp/pdf%20files/JES22/14_Kawai.pdf)

大学院の修士課程では中期エジプト語の文献の読解に問題がないようにしておき、加えて古期エジプト語 (Old Egyptian) と後期エジプト語 (Late Egyptian) の基本が欲しいところである。大学院に進学してから、ドイツ語やフランス語の勉強を始めるのでは全く間に合わない。古代エジプト語は、学部時代に学ぶ機会がなければやむを得ないが、大学院に入ってから勉強を始めるのでは修士論文で使うにはかなり大変であることは知っておいたほうがいいであろう。

ここで、マネトは第5王朝を248年としているが、ワデルが指摘しているように第5王朝の王たちの治世を計算すると218年にしかならない。これは、今日まで伝わる資料が書き写しの部分的な写本であるため、単純な間違いかもしれない。あるいは、次の第6王朝の最初の王であるテティ王の治世が30年とあるため、これを足すとちょうどいい数字になるからかもしれない<sup>11</sup>。実は、第5王朝と第6王朝の断絶の理由がよくわかっていない。第5王朝と第6王朝が断絶せずに続いており、さらにむしろテティ王のところで断絶があったとすれば辻褃は合うことになる。これも、エジプトの資料の扱いがむづかしい例になる。

ここでマネトがあげている王の名前は、ギリシア化されている。つまり、語尾にエスの音が付け加えられている。ウセルケレースはウセルカフ、セプレースはサフラ、ネペルケレースはネフェルイルカレ、シシレースはシェプセスカレ、ケレースはカネフェルレー、ラトゥレースはニウセルレー、メンケレースはメンカウホル、タンケレースはジェドカレ、オンナスはウニスに当たると考えられている。マネトが残す王の名前にいくつか気になるところがあるとはいえ、今日の研究者の考えと大きく変わらない。今日でも、マネトがエジプト学の基本とされるところである。

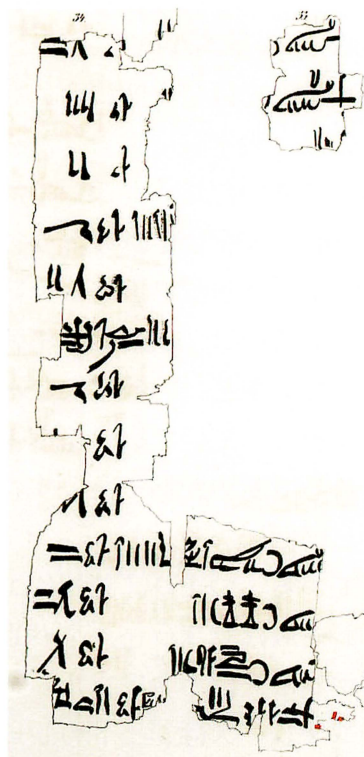
このように、エジプト学の基本となるマネトの資料では、王の名前と治世の長さしか触れられていない。王の名前もギリシア化されており、象形文字などで残る当時の資料とつぎ合わせる必要がある。このあたりが、ヘロドトスやアリアノスの例に見られるような古代ギリシアやローアの歴史資料と大きく異なるところになる。

では、ほかに使われる資料はないであろうか。マネトの次に研究者が利用するのが、「トリノ王名表」<sup>12</sup>である。新王国時代第19王朝のラムセス2世の時代にパピルスに書かれたものである。保存状態が良くなく、なかなか難解であるが、重要な資料になっている。

以下にあるように、このパピルスは断片になってしまっており、復元にかかなり苦労しているはずである。本来は、ヒエラティックで横書きで書かれており、右から横に読む。右手のものは、同じ部分を象形文字にしたものである。

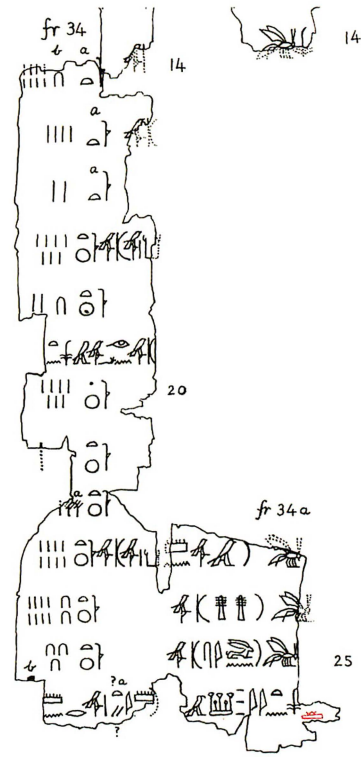
11 Waddell, Manetho, p. 51, n. 2.

12 Richard Lepsius, *Auswahl wichtigster Urkunden des Ägyptischen Altertums* (Leipzig, 1842); Alan Gardiner, *Royal Canon of Turin* (Oxford, 1959).



(Auswahl wichtigsten Urkunden des Ägyptischen Altertums, Taf. IV)

トリノ王名表



(The Royal Canon of Turin, pl. II)

エジプト学者は、先にあげた中期エジプト語から学び、次いで古期エジプト語や後期エジプト語を学ぶ。これに並行して、ヒエラティックという書体を学ぶことになる。これも、時代の中で変化していくため、それぞれの段階の言語で書かれたなるべく多くの文書を実際に読んで勉強していくことになる。一方で、ヒエラティックからヒエログリフの書体への移し替えはあまり大きな問題がないため、特に問題のある個所を除いては、通常、エジプト学者はヒエログリフに移したものを利用している。

「トリノ王名表」は、何分、数千年も昔にパピルスにヒエラティックという書体で書かれているため、これらの断片を合わせて正しく読むのは至難の技となる。資料というのは随時新しく解釈されていくものであり、決定版というものは期待できない。

では、もう少し詳しく見てみる。ウニス王は、象形文字では、𐀀𐀁 と書かれる。下から2行目にウニス𐀀𐀁とあるが、その文字の前には、一部欠損があるとはいえ、「上下エジプト王」(𐀀𐀁) と書かれている。ウニスの文字は、カルトウーシュと呼ばれる楕円形の輪の中に入っているが、ヒエラティックではカルトウーシュの輪の上と下の部分が書かれない。そして神の決定詞 (𐀀) がついている。古代エジプトでは、王は神であった。その後ろには治世を意味する文字 (𐀀) が見られ、数字がかかっている。馬の蹄につける蹄鉄の形をした文字 (𐀀) があるが、これが10を意味する。3つあるため、30となる。ここでは、治世と関連しているため、30年を意味する。

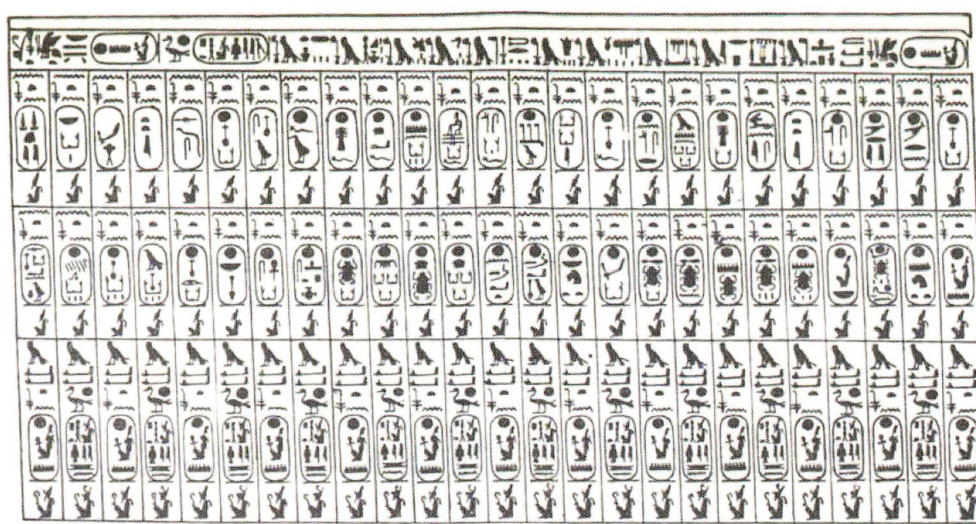


つまり、「トリノ王名表」においても、マネトの『歴史』と同じく書かれているのは、古代の王の名前とその治世の期間を表す数字だけになる。歴史的な事件が書き残されているわけではない。このウニス王の30年という治世の数字は、マネトの『歴史』では33年とあった。微妙に違うとはいえ、一般的には、30年ないし33年という形で受け入れられている。

「王名表」と呼ばれるものは、他にもいくつか残されている。「アビドス王名表」<sup>13</sup>というものがある。アビドスにあるセティ1世の神殿に壁面に彫り込まれている。セティ1世は、新王国時代第19王朝の王である。左手にいるのがセティ1世であり、祖先に供物を捧げている。一番手前にあるのが、メニ王で、マネトではメネスと呼ばれているエジプトの最初の王であると考えられている。そのあとに歴代の王の名前がセティ1世まで記録されている。



The King List of Abydos.

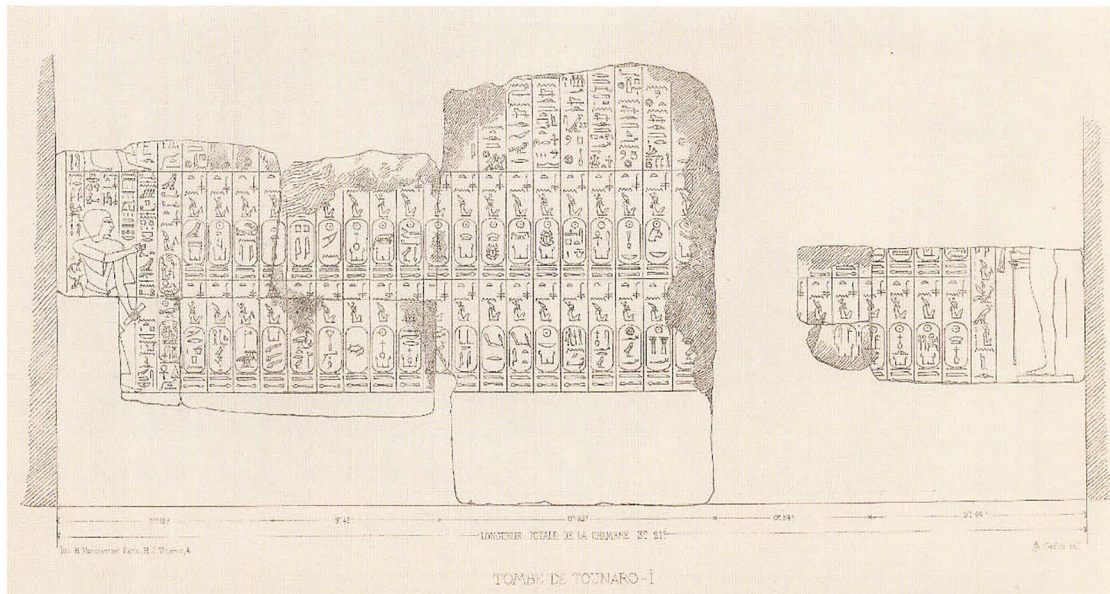


アビドス王名表 (The Nile: Notes for Travellers in Egypt, p. 6f.)

13 E. A. Wallis Budge, *The Nile: Notes for Travellers in Egypt* (London, 1902).

この「アビドス王名表」では、王の名前しか書かれていない。この王名表は3段に分かれているが、ウニスの名前があるのは、上の段の後ろから6番目になる。王名表は横に長いため、上の Budge の本では左半分と右半分の上下に分けてある。したがって、ウニス王は、下側の表になり、その上段で右から6番目になる。

また、「サッカラの王名表」<sup>14</sup> というものもある。これは、「神官の長」の肩書を持つ人物の墓に書かれて、ラムセス2世までの王の名前が残されている。大きく破損しているが、ウニス王の名前は、左手の人物の顔の前、3つ目のカルトウーシュのなかに書かれている。こちらも、王の名前が残っているだけである。



サッカラ王名表 (*Monuments divers recueillis en Égypte et en Nubie*, pl. 58)

ヘロドトスやプルタルコス、あるいは、アリアノスのような歴史家は古代エジプトにはいない。それどころか、歴史の記録といえるのは、王の名前が残されているだけであり、せいぜい治世が何年あったくらいまでしか情報が手に入らないのである。そこで、古代エジプトの歴史を考える場合、多くのあいまいな点が出てくることになる。

ウニスの治世は、すでに見たように30年ないし33年と古代の資料は伝えており、そのように今日でも言われることが多いが、今に残っている遺物などの資料には治世20年や治世30年という年号はないようである。そこで、治世は9年とプラスアルファ<sup>15</sup>とか、20年とか

14 A. Mariette, *Monuments divers recueillis en Égypte et en Nubie* (Paris, 1872).

15 Cf. Miroslav Verner, "Archaeological Remarks on the 4th and 5th Dynasty Chronology," *Archiv Orientalni* 69 (2001), 410-412, 416.

説が出てくることになる。もっとも、今残っている資料というのも10点を越えておらず、判断するには早すぎるのであろう。

ウニス王は、第5王朝最後の王であり、ここで第5王朝が終わるとされている。次の第6王朝の初代の王はテティ王であるが、何か内紛があったような痕跡はなく王朝の移行はスムーズであった。そこで、エジプト学者は、テティ王がウニスの子ではなかったが、彼の妻がウニス王の娘であったからであろうと考える。エジプトの歴史研究は、いかにも想像の賜物と言わざるを得ない面が出てきてしまう。

ウニスの娘とされるイドウートはどうであろうか。彼女のマスタバ墓がウニス王のピラミッド複合体の中にあるため、彼女はウニス王の娘と考えるのが自然である。ただ、彼女は「王の腹の娘」というタイトルしか持っておらず、父の名前が明確には書かれているわけではない<sup>16</sup>。カナワティ<sup>17</sup>という著名な研究は、イドウートがウニスの娘ではなく、次のテティ王の娘と考えている。なぜならば、彼女のマスタバのなかに描かれている従者の名前になかに「テティ・アंक」という名前が残っているからである。次の王の名前が組み込まれた名前を持つ者がいるならば、イドウートもウニスではなく、第6王朝初代の王、テティの娘と考えられるということである。

このような曖昧さ、つまり、研究者間での意見の相違は、他の分野以上にエジプト学では宿命である。

### 3 第5王朝の時代

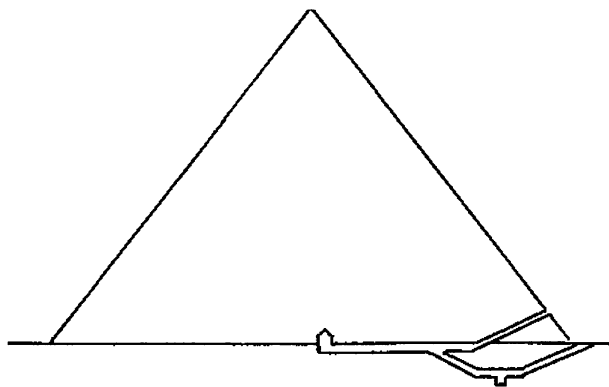
古王国の第5王朝代とは、どのような時代と考えられているであろうか。古王国の第3王朝初代の王、ジョセルが高さ60mあまりの階段ピラミッドを建設した。このピラミッドは、今日でもサッカラにそびえており、サッカラ遺跡群のランドマークになっている。高さが60mあれば、十分に見る者をして感動を与えることができる。その後、第4王朝の初代の王、スネフェルは真正ピラミッドの建設を始め、90mを超える大きなピラミッドを3基も建設している。メイドウム、ダハシュールの屈折ピラミッド、同じくダハシュールにある赤いピラミッドである。いずれも大変な労力が必要であったはずであり、それを一代で3基も建設したことから、その建設過程で相当な技術革新が進んだであろう。

古代エジプトでも最大の大きさを誇るピラミッドを建設したクフ王は、スネフェルの息子であり、彼の高さ150mほどのピラミッドはこのような巨大石造建築に伴う様々な蓄積を裏付けにしてできたものであろう。次のカフラー王も、父クフ王に並ぶ巨大なピラミッドを建設し

16 イドウートの父が誰なのかという議論は、すでに当初からなされている。Zaki Y. Saad, "A Preliminary Report on the Excavations at Saqqara 1939-1940," *ASAÉ* 40 (1940), 690-692.

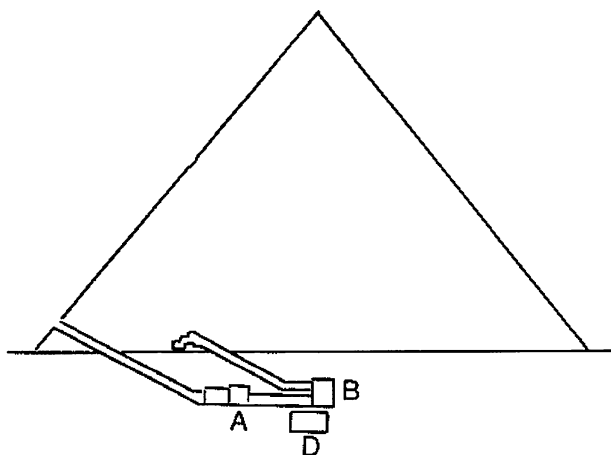
17 Naguib Kanawati and Mahmoud Abder-Raziq, *The Unis Cemetery at Saqqara, Volume 2: The Tombs of Iynefert and Ihy (Re-used by Idut)*, (Oxford, 2003).

た。ただし、彼は本来もっと大きなピラミッドを作りたかったのではないであろうか。カフラーのピラミッドには、通路が2つある。一方の通路はその入り口がピラミッド本体から外にある。この不思議な通路が本来の計画であったとすれば、カフラーのピラミッドはクフ王のものを大きく上回ったことであろう<sup>18</sup>。



カフラーのピラミッド (LÄ IV, p. 1232)

次のメンカウラーのピラミッドは、三大ピラミッドのなかでももっとも小さく、その高さは60m 少ししかない。しかし、このピラミッドも内部に2つの通路がある。現在使われている、あるいは、当時使われることになった通路は、その入り口が他のピラミッドに比較して極めて低い位置にある。メンカウラーのピラミッドの低い入り口の高さが他のピラミッドの入り口と同じくらいの高さになるまでピラミッド本体を大きくしていくことが、本来の計画であったかもしれない。そうすれば、彼のピラミッドは現在のものよりかなり大きくなったはずである。メンカウラーの時代、ピラミッド建造に注入できるエネルギーは劇的に減少したと考えられる。途中で放棄された通路が現在のピラミッドに適切であるように思われるが、この通路の完成さえままならなかったと思われる。



メンカウラーのピラミッド (LÄ IV, p. 1235)

18 カフラーとメンカウラー王のピラミッドに通路についての解釈は、以下を見よ。 *Lexikon der Ägyptologie*, Vol. 4, pp. 1232- 1239.

たしかに、第4王朝のクフ、カフラー、メンカウラーの時代は古王国時代の絶頂期を表しているが、すでにカフラーの時代にはピラミッドの巨大化は断念されており、メンカウラーの時代にはピラミッドは急速に小型化するのである。

では、第5王朝はどのような時代であったのであろうか。アルテンミュラー (Hartwig Altenmüller) は「変化の時代」(a time of change) と述べている<sup>19</sup>。彼が述べるところを簡潔にまとめてみる。

それまでの神王を軸にした中央集権化した国家から官僚国家へと姿を変えた。高級官僚は、もはや王族によって独占されることはなく、官僚という層が現れることになった。第5王朝の中ごろからは、各州を管理する官僚は、王都ではなく、勤務先に住まいするようになった。はじめ報酬として与えられていた土地・民は、あくまでも彼らの職務と結びつけられており、王家の財産であったはずであるが、やがて職務は世襲されるようになり、土地や民も官僚の私的な所有物となった。このような地方の官僚は、州侯として墓を自分の州に作るようになる。こうなると、中央政権から離れて、地方貴族が生み出されてくる。彼らの富の増大に連れて、彼らの墓は立派になっていく。手工芸品も、王家のものと質の差が無くなっていく。また、初めて役人の伝記が現れる。ジェデフラーからサフラーの時代に生きたネシトプウネフェル、ウセルカフとサフラーの時代に大臣となったセケムカレー、メンカウラーからニウセルラーの時代のプタハシェプセスがあげられる。

続く第6王朝も始まりは、テティ王とされている。しかし、第5王朝から第6王朝の移行には問題があったとは思われない。人事にも移動がないため、どうしてマネトがここで王朝を変えたのかは謎となっている。アルテンミュラーは、テティがウニスの義理の息子であったためかもしれない (possible) と述べている<sup>20</sup>。彼の言葉で、この第6王朝についてまとめてみる<sup>21</sup>。

第6王朝では、初めのテティやペピ1世によって改革が進められ、多くの勅令が出されている。それらは、王への税、賦役、寄進の免除にかかわっており、かえって地方分権化を進めて、国家の多くの財産が個人や神殿の所有になり、州政府は自立するようになっていった。第6王朝の中ごろには、故郷に大型の岩窟墓やマスタバ墓を作るようになり、彼らが持つ称号も数が増えていく。王朝の終わりまでには、宰相という称号は意味をなさなくなる。つまり、地方の州侯が宰相の権威を無視できるような地位と称号を持つようになるからである。

第5王朝最後のウニスの時代は、どのような状態であったのであろうか。ウニス時代の史料は極めて少ない。

---

19 *The Oxford Encyclopedia of Ancient Egypt*, Vol. 2 (Oxford, 2001), p. 597f.

20 *Ibid.*, p. 601.

21 *Loc. cit.*

#### 4 史料を読みながら

古王国がどのように、いつ崩壊したのかは正確に分かっているわけではない。仮に第6王朝の終わりとすれば、ウニス王の時代からさらに180年ほどの時間があることになる。ウニス王の時代は、「変化の時代」として強固な王族による中央集権体制が崩れはじめ、地方の有力者が力を持ち始めた時代ではあったであろう。地方の有力者は、都ではなく、自らの領地に墓を作り、独立の度合いを高めていったはずである。

一方で、決して王に対して反旗を翻すわけでもなく、王を称えている。別の見方をすると、第4王朝時代のクフやカフラーの時代には、権力ばかりではなく、資源やそれを活用する技術やノウハウもすべて王の手に握られていた。クフやカフラーの時代から150年ほどたち、ピラミッド建設に集約される数々のノウハウが地方の有力者にも広まり、彼らは王に忠誠を誓いながら、あるいは感謝しながら、その技術を自己の領地の資源を活用しながら満足していたのではないか。

すぐれた技術は、独占されることができず、広まっていく。ウニスの時代は、クフやカフラーの偉大な技術が王個人にだけではなく、地方の有力者にも広がり、活気に満ちていたのかもしれない。王族による一元的な支配が崩れて、王国が衰退していたというよりも、技術や資源が全国に広く使われるようになり、一種の活気があったかもしれない。

このあたり雰囲気ネケブウ  $\text{𓆎} \text{𓆏} \text{𓆐}$  という人物の碑文から見てみたい。彼は、第5王朝から第6王朝まで活躍した一族の一人である。彼の石碑は、ギザの大ピラミッドの北西で1913年に発見されたが、その際、すでに破壊されており、ブロックの状態になっていた。現在は、ボストンとカイロで保管されている<sup>22</sup>。ボストンにあるものは、礼拝室の脇柱の左側、カイロにあるものは右側のものである。

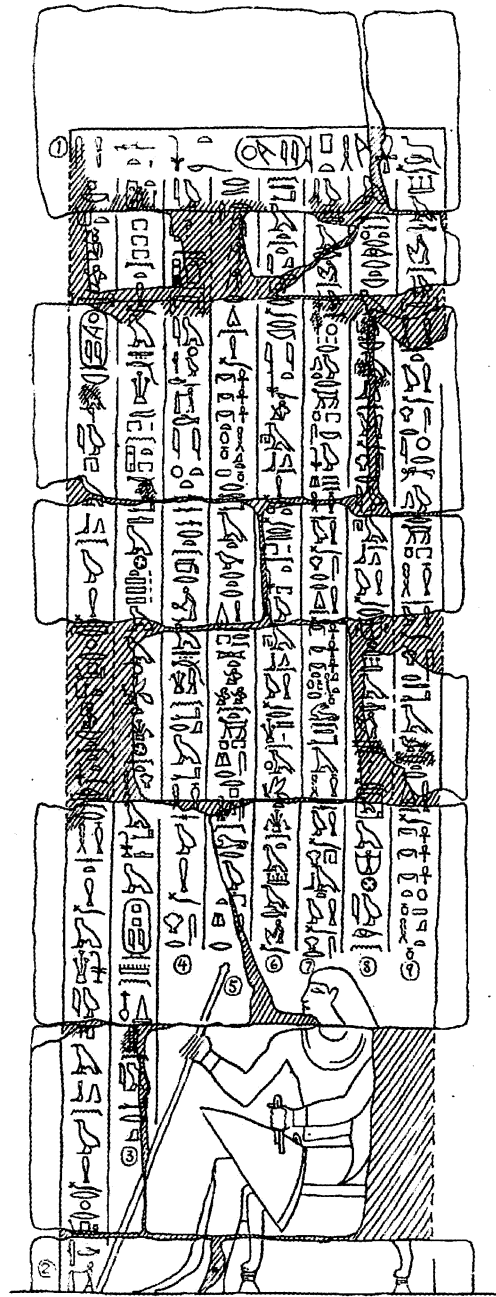
彼自身は、第5王朝のウニスの時代ではなく、次の第6王朝ペピ1世時代の人物であり、20年ほど後の時代になる。彼の碑文は、彼が出世していく過程を述べており、古代エジプトに数多く残っている様々な肩書の上下関係が想定できることで知られている<sup>23</sup>。

彼の伝記は、ボストンにあるテキストから始まり、カイロにあるテキストに続き、彼が王から与えられた4回のミッションを順次こなしてゆき、王によって称えられることが述べられている。本稿で見たいのは、彼のミッションが都周辺での作業ばかりではなく、地方での運河の開削などの作業も多く、地方に技術を伝え、地方を豊かにしていった様子がうかがえる点である。

22 Dows Dunham, "The Biographical Inscriptions of Nekhebu in Boston and Cairo," *Journal of Egyptian Archaeology* 24(1938), 1-8 (plates I, 1-II). 本稿で用いたボストンのテキストは、Dunhamが校正したものである。彼に先行した出版は、以下である。K. Sethe, *Urkunden des Alten Reichs* (Leipzig, 1933), pp. 215-221.

23 Cf. Dunham, *Journal of Egyptian Archaeology* 24(1938), 7.

以下、ボストンのテキストを訳し<sup>24</sup>、その雰囲気を見てみたい。彼の3回目までのミッションを訳してみた。カイロのテキストには、4回目のミッションが触れられているが、紹介するには長くなるため割愛する。



ネケブウの碑文 (JEA 24, pl. II)

24 以下の文献が新しい訳を出している。Nigel C. Strudwic, *Texts from the Pyramid Age* (Leiden, 2005), pp. 265-269. 古代エジプト語の文献は、訳者によってかなり異なった訳がなされるのが通常であり、重要なのはそれぞれの訳者の根拠が理解できるかどうかである。

*zmr w<sup>c</sup>t(i) mdḥw nswt Mr(i)-Pth-<sup>c</sup>nḥ-Mr(i)-R<sup>c</sup> dd.f*

唯一の友、王の建築家、メリ・プタハ・アंक・メリラー<sup>25</sup>。彼は言った。

*ink k3(w)t(i) n Mr(i)-R<sup>c</sup> nb.(i)*

私は、メリラー<sup>26</sup>、わが主の作業者であった。

*iw h3b.n wi ḥm.f r ḥrp k3t nbt nt nswt ir(i).n.(i) r ḥz(i)t ḥm.f m Mḥw Šm<sup>c</sup>w*

陛下は私を王のすべての作業を管理するために派遣した。私は、下エジプトと上エジプトにおいて陛下の満足のために行った。

*iw h3b.n wi ḥm.f r ḥrp kd ḥwwt-k3 nt ḥm.f m t3-Mḥw gs-pr n ḥwt<sup>c</sup> mht(i) m niwt-šw m 3ḥ-bit nt Hr<sup>c</sup> rs(i) m Mn-nfr-Ppy.*

陛下は、下エジプトで陛下の葬祭領地（カーの家）の建設と領地の行政府を監督するために私を派遣した。「湖の町」と「ホルスのケンミス」の北で。「メン・ネフェル・ペピ」（ペピ1世のピラミッド）の南で。

*ii.n.(i) <sup>c</sup>rk(w) iw /// ḥwt-k3 im ḥd.(i) ḥws.(i) (w)dy ḥwt (i)r(i)t ndr(w) m t3-Mḥw*

私は戻ってきた。（それが）完了したのちに。・・・葬祭領地（カーの家）をそこで。私は建設し、実行した。下エジプトで切断する木材が置かれたのちに。

*ii.n.(i) <sup>c</sup>rk(w) m-<sup>c</sup>(i) ḥz(i) w(i) ḥm.f ḥr.s r-gs srw*


私は、私の力で（それが）完了してから戻ってきた。陛下は、それ故に私を高官たちの前で称賛した。

*rdi n.(i) ḥm.f nbw-<sup>c</sup>nḥw t ḥnkt r<sup>c</sup>3t wrt r*

陛下は私に「生命の金」（?）、パン、ビールを大量に与えた。

*rdi ḥm.f pr(i) n.(i) tzt nt ḥnw ḥr.s r ph.sn rwt.(i) ḥr.s n-<sup>c</sup>3t nt ikr.(i) ḥr.f r ky mdḥw-nswt h3b.n ḥm.f ḥft r gs-pr n pr-nswt*

陛下は私のところにそれをもって宮廷の一団を来させた。彼らが私の家の門にいたるまでそれをもって。私が、陛下が王の役所に以前に派遣した他の王の建築家のよりもすぐれていたために。

25 。ネケブウの別名である。

26 は、ペピ1世の上下エジプト王名である。



*iw h3b w(i) hm.f r h3 mr n 3h-bit nt Hr s3d.f*

陛下は、「ホルスのケンミス」に運河を築き、それを掘るために私を派遣した。

*s̄d.n.(i) sw ⋯r iwt r hnw sk sw hr mw*

私はそれを掘った。宮廷に来るまで。それは、すでに水の下にある。

*hz(i) w(i) hm.f hr.s rdi n.(i) hm.f nbw-<sup>c</sup>nhw t hnkt*

陛下は、それゆえに私を誉めたたえました。陛下は私に「生命の金」(?)、パン、ビールを与えた。

*wn 3 hz(i) w(i) hm.f hr h3bt wi hm.f m nht r ir(i)t nb(t) k3t nb(t) h3bt.n w(i) hm.f hr.s*

陛下の私への寵愛は大きかった。行われることすべて、陛下が私を派遣したすべての作業に力ある者として私を派遣したゆえに。

*iw h3b.n w(i) hm.f r Kis r s3d mr n ///fn hwt-hr m Kis*

陛下は私をキスへ派遣した。キスのハトホルの彼の・・・運河を掘るために。

*iw ir(i).n.(i) s̄d.n.(i) sw r hzzt wi hm.f hr.s*

私は働き、私はそれを掘った。陛下が私を称えるために。

*ihw iw.i r hnw hz(i) w(i) hm.f hr.s r 3 wrt*

私は、宮廷に戻ることになった。陛下がそのゆえに私を大いに称えるために。

*rdi n.(i) hm.f nbw-<sup>c</sup>nhw t hnkt*

陛下は私に生命の金、パン、ビールを与えた。

ウニス王に時代とほぼ同じころ、王は王都でのピラミッドなどの建設ばかりではなく、上エジプトや下エジプトで様々な工事を行っていたことが分かる。第1回目のミッションでは、彼は「下エジプトで陛下の葬祭領地の建設と領地の行政府を監督」した。第2回目では、「『ホルスのケンミス』に運河を築き、それを掘る」ことが任務であった。第3回目では、「キスのハトホルの彼の・・・運河を掘る」ことを目的としていた。

たしかに、ネケブウは有力な一族に属していたが、世襲の形で自動的に権力を得ていたのではなく、様々な努力をして、その報いとして得ていた<sup>27</sup>。カイロのテキストでは、彼のキャリ

27 Dunham, *Journal of Egyptian Archaeology* 24(1938), 7.

アを次々とあげており、最後に以下のように述べている。

*ir(i).n hm.f mr-ḳd n-ʕt-nt ḥzzw hm.f [ r ḥt nb(t)]*<sup>28</sup>

陛下は、(以上のこと) すべてを行なった。陛下が私を何よりも愛していたからである。

彼が伝記のなかで必ず忘れずに述べているのは、王のため仕えて、多くの褒美をもらったことであった。かつて王が独占していた技術を使い、自らの出世のために地方でその能力と技術を行使したのであろう。

## 5 終わりに

本稿では、古代エジプト史の研究の特色あるいは問題点について、日本では西洋古代史として一括して扱われることの問題点を見て、さらに古代エジプトの歴史資料の特色を見てみた。そのあと、ウニスの時代の雰囲気を見るために、正確には、少し後の時代の資料であるネケブウの碑文を用いて、古王国の第5王朝末期や第6王朝の初頭の雰囲気を考えてみた。

ウニスの時代は、古王国の絶頂期であるクフ王の時代から150年ほど経っており、今日なお人に畏敬の念を持たせるようなピラミッドはもはや作ることができなくなった時代であった。一方で、古王国が崩壊するにはまだ180年ほどあり、社会は必ずしも危機的な状態ではなかったように思われる。むしろ、自分の力を信じて、その力を発揮して、出世する役人が生まれてきていた。彼らは、確かに一族を形成していたが、その特権が自動的に子孫に譲られることはなく、各人がその自ら都ばかりではなく、地方にも赴いて、国の富を分配し、地方に運河を開削して、その地を豊かにしていったように思われる。

---

28 *Urk. I*, 216, 5.